

例は決して少きに非ず、而して其の中の一方の形が其の種族中の特種の部落の名稱として認めらるゝに至ることは必ずしも怪しむべきに非ず、殊に突厥なる文字は果して正しくTurkの音を寫したるものなりや否や、慎重の考慮を要すべき問題にして、Pelliot氏は此の字の古音をDwie-k'iuéなりしならんと考へ、dirkit = Turkütなる形を寫したるものならんといひ、而してかゝる形は何れにも見えず、またトルコ語の形とも思はれざれば、思ふに蒙古語に於るTurkの複數形にして蒙古族なる蠕蠕がTurkをかくTurkütと稱したるを、支那にて此の文字にて寫せしならんといへり(L'Origin de T'ou-kiue. T'oung Pao, Décembre 1915)<sup>補⑩</sup>。語尾のk音を寫すに厥字を以てするが如きは全く異例なれば、或は此の説可ならんか、果して然らば鐵勒こそ却りてTurkの音を正しく傳へたるものと見得べきに似たりとする等の點にあり。Parker氏は鐵勒をTerekの音を寫したるものと見、蒙古語delegei(地)は之と或る關係を有するものならんといひ(A Thousand Years of Tartars, p. 266)。白鳥博士は蒙古語にて車の義なるteregeの音譯ならんと説かれたり(蒙古民族の起源、史學雜誌第十八編ノ五、第四九九頁)。なほ歐洲學者にしてThomsonの説を認めざるものとしてはBarthold氏の如きあり、Historische Bedeutung der alttürkischen Inschriften, S. 9に其の考を述べたり。

- ② Bretschneider, *Mediaeval Researches*. I. 262-263; Rockhill, *The Journey of Friar William of Rubruck*, p. 141.  
③ Bretschneider, *ibid.* p. 262.

④ Bretschneider, *Mediaeval Geography*, p. 115-116. 同氏の *Mediaeval Researches* I. p. 251. にて、十三世紀の初め迄は、西方にはUigurの名は知られずと記せり。

⑤ Radloff. *Kudatku Bilik*, Theil I. S. 1. Vambery, *Kudatku Bilik*, Einleitung, S. 1.

⑥ Müller, *Uigurica* II, S. 95.

⑦ Le Coq. *Festschrift für V. Thomsen*, S. 147.

⑧ 此の貨幣は方孔を有せる支那風の銅貨にして、次の文字の刻せらるゝを明らかに認むるを得。これについては別稿「回鶻文字考」追記参照、また「西域文明史概論」一八六頁に圖版を附したり。錢文は右から左へ讀む。